

[70]文學研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/2339149>

出版情報：文學研究. 70, 1973-03-25. Faculty of Literature, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

<p>「文学研究」筆者別索引(筆者はABC順による) 括弧内は輯号を示す)</p>	<p>安東俊六 杜甫の思考形態と詩作(七〇)</p>	<p>有田忠郎 「悪の華」の統一性について(五一) 詩と近代世界(六〇) —フランスの場所を中心とする一つの覚え書— 詩と近代世界(六一) —初期のヴァレリーをめぐって— サン・ジョン・ペルス「流謫」一(六二) —翻訳と註解の試み—</p>	<p>千代正一郎 独逸的なもの(三三)</p>	<p>蛭原啓 変化するシーザーのイメージ—シーザー論—(七〇)</p>	<p>福田良輔 奈良朝時代東国方言の成立について上(三七)・中(三八) 下(四〇) 奈良朝時代東国方言成立に関する諸問題(四二) —亀井孝氏・金田一博士の批判に答えつ—</p>	<p>古事記の純漢文的構文の文章について(四四) 筑前国志賀白水郎歌十首の作者の複数性について— —表現形式と伝誦性とを中心に—(四六) 古代語法存疑—エ列音の連体形—(四八) 古代語法存疑—久語法について(五〇) 奈良時代東国方言の周辺 —言語基層・八丈方言・補説—(五三) 奈良時代東国方言の音韻状態(五六) 古代日本語に現われてゐる動詞型連用形の特異形について(五七) 古代日本語における複語尾の四段活用「る」の一考察(五九)</p>	<p>中央語系日本語における音節結合 —有坂法則について—(六〇) 表記法から見た万葉集卷十四の成立について(六一) ア列音の活用機能とク語法(六五)</p>	<p>芳賀敬治 イアゴーの動機をめぐって(六〇)</p>	<p>林田慎之助 韓愈における發憤著書の説(七〇)</p>	<p>樋口忠治 トオマス・マンの「すげかえられた首」の一問題(六〇)</p>
---	--------------------------------	--	-----------------------------	---	--	--	---	----------------------------------	-----------------------------------	--

平野 尊識

On the Concept of "Word" in the Japanese Language,
with Special Reference to Postpositions and Auxiliaries
(七〇)

今井 源 衛

花山院研究 一(五七)・二(五八)・三(六一)
「八重葎」に就いて(五九)
松本文庫本「光源氏一部謡」翻刻上(六二)・中(六四)・
下(六七)
紫式部の出生年度(六三)
枕草子の古注釈書―素行筆本について―(六五)
戒仙について―業平から貫之へ―(六六)

伊 藤 利 男

ゲーテとフロイト―自叙伝記述の問題をめぐって―(七〇)

春 日 和 男

指定表現の様式―発生過程よりの考察―(五〇)
「花桜をる少将」における語彙―小弓その他―(五一)
下照姫の歌―歌格と提示法と―(五二)
「也」字の訓読考
―「なり」の表記としての「也」字―(五四)
聴覚および視覚による表現上(五六)・下(六〇)

指定辞「たり」雑考

―特にその発生と用法と―(五七)
草仮名による字音表記(五八)
慶長十五年聞書
貞享 三年書写
五逆秋(無門関鈔)の国語学的研究 一

―序 指定辞の様式―(六一)

前田家本日本霊異記の性格―「師自夏傘之」考―(六五)
説話文体の効用―「今昔考」の終りに―(六六)
慶長十五年聞書
貞享 三年書写
五逆秋(無門関鈔)の国語学的研究(二六八)

春 日 政 治

片仮名交り文の起源に就いて(一)
古訓漫談(二)
「小学方言講義」より(四)
高野山にて観たる古点本(七)
宇治拾遺物語の一本より(九)
金光明最勝王経註釈一本の古点について(二四)
法王帝説統考(二二)
聖語藏御本央掘魔羅経の字音点(三三)
古訓語彙小放(三三)
一八五〇年和訳の馬太伝(三六)

片 山 正 雄

文学科概説(一)

<p>小 牧 健 夫</p> <p>ヘルデルリンのエトナ劇断片 (一) クライストの「公子ホンブルク」の一問題 一(六〇)・二(七八) 銀の鈴 (一一) ゲーテの従軍記 (一五) ヘルデルリンの半神観 一(二二)・二(二四)・三(二六) 菜花行 (二三) クライスト随想 (二八) 独逸浪漫主義の諸問題 一(三〇)・二(三三) 正岡子規とレッシング (三三) 西方寺の庭 (三五) われもまたアルカディアに (三六) 砂に書く (四〇)</p>	<p>小 室 光 弘</p> <p>土と文芸 (三三)</p> <p>小 西 昇</p> <p>後漢に於ける楽府詩流行の状況について (六〇) 漢代楽府詩における詩経の連想的表現方法の衰減 (六一)</p>	<p>小 島 吉 雄</p> <p>明治初期の歌論 (一) 宗祇の晩年 (三) 新古今和歌集の撰集態度と撰集事業 (五) 所謂石津本新古今和歌集に就いて (八)</p>
<p>連歌における美的情調 一(一一)・二(一二)</p> <p>新古今集歌風と註釈の問題 (一八)</p> <p>春日博士所蔵二十一代集中の新古今和歌集に就いて (三三)</p> <p>後鳥羽院の御文学 (二五)</p> <p>新古今集写本に於ける撰者名の頭書について (二八)</p> <p>新古今集伝本考 (三〇)</p> <p>わが国近世の運命悲劇 (三三)</p> <p>見るに随ひて (三四)</p> <p>池袋清風の訳詩 (三五)</p> <p>「奥の細道」覚書 (三七)</p> <p>芭蕉の「荒海や」の句について 一(三八)・二(三九)</p> <p>歌集「みだれ髪」を論ず (四〇)</p>	<p>国 松 孝 二</p> <p>愛と憎しみ―「ニーチェと古典文献学」の一章― (三五)</p> <p>運命への目覚め (三六)</p> <p>ドイツからの脱出</p> <p>―ニーチェの個人主義の基底について― (三八)</p> <p>ゲーテの革命劇をめぐって (三九)</p> <p>ニーチェについて (四〇)</p>	<p>前 川 俊 一</p> <p>ワーズワースとソールズベリーティンタン旅行 (三七)</p> <p>ワーズワースにおける自然観の進展 (三八)</p> <p>ワーズワース「辺境の徒」について 上(四〇)・中(四二) 下(四三)</p>

<p>丸田裕子 「風ヶ丘」の語り手ネリイ・ディーンに関する一考察(六二)</p> <p>松枝茂夫 鏡花縁の話―異国廻りを中心として(二六) 蝶庵居士張岱(二八) 菜天寥とその一家(三〇) 醒世姻縁伝の話(三二)</p>	<p>バイロンの「ドン・ジュアン」(四) 「壮大なる耳目の世界」上(四五)・中(五五)・下(六四) ―ワーズワースの空間感覚、其他について― 英京雜記(五二) ルーン詩群について(五四) ワーズワースとデイヴィッド・ハートレの哲学上(五七)下(五八) コウルリツヂ「老水夫の歌」訳(五九) ワーズワース「序曲」冒頭五四行の創作年代について(六一) 「ひとり麦刈る乙女」考 ―「壮大なる耳目の世界」拾遺―(六五) イエイツ愛機詩抄―試訳―(六六) ヴィクトリア朝詩雜抄(六七) 英詩雜抄(試訳)(六八) 芭蕉とワーズワース(六九) 「文学研究」によせて(七〇)</p>
<p>目加田 誠 填詞選釈(二三) 民国以来の中国新文学(二四) 雅に就いて(二〇) 白楽天の諷論詩(二三) 幽詩考附東薪考(二五) 詩経に詠はれた自然界(二七) 陳碩甫伝(二九) 春秋の断章賦詩に就いて(三一) 詩教(三二)</p>	<p>松田伊作 アナト神話―ウガリット語研究覚書Ⅰ(六五) クリト叙事詩(1)―ウガリット語研究覚書Ⅱ(六六) クリト叙事詩(2)(II K, II K) ―ウガリット語研究覚書Ⅲ(六八) 旧約ヘブライ語の対人精神活動動詞の意味(七〇)</p> <p>松浪 有 Functional Development of the Present Participle in English. Part I (六三)</p>

<p>文心雕龍 (三四)(三五)(四〇)(四一)(四七)(六〇)(六一) 洛神賦 (三六) 六朝文芸論に於ける「神」「氣」の問題 (三七) 詩格及び詩境に就いて (三八) 李笠翁の戯曲 (三九) 曹禺の戯曲 (四二) 王維—安史の乱と詩人たち— (四三) 楽府についての一考察—民歌と文人の詩との問題— (四五) 水滸伝解釈の問題 (五〇) 聞一多評伝 (五一) 擊海花 (五四) 礼教喫人 (五六) 二人の宝玉 (五七) 九歌試訳 (五八) 紫陽花 (六三) 「文学研究」の思い出 (六五)</p> <p>森 永 隆</p> <p>謝恩 (三三)</p>	<p>森 山 隆</p> <p>上位オホラ音節の結合的性格 (六〇)</p> <p>元 田 脩 一</p> <p>『アッシャー家の崩壊』とゴシック・ロマンス (六三) 『おじの回転』の諸解釈 上(六四)・下(六五) トルーマン・カポーティ「遠い声、遠い部屋」の限界(六七) ニュー・ゴシックとしての『夜の木その他の短篇』(六八) ナサニエル・ホーソン『ラパチーニの娘』 —限界への挑戦者と屈従者— (六九)</p> <p>村 山 七 郎</p> <p>権左(ボモルツエフ)・ア・ボグダーノフ共著、簡略文法 について(六六) DYBOWSKIのシムシム島アイヌ語資料について(六七) 新スラヴ・日本語辞典における18世紀初めの薩摩方言語彙 (六八) Etymologie des Aj Kusiro "Armband"—NIK, MK Kusil "Jewel" (六九) 感想 (七〇)</p> <p>永 田 英 一</p> <p>ヴィニエの哲学詩について (三三) アンドレ・シェニエ(詩人と市民) (三五) スタール夫人「ルソーについての書簡」(三六) (四〇)</p>
<p>毛 利 可 信</p> <p>英国中世詩解釈ノート (五八) 中世英詩「シシリ」のロバート」試訳 (五九) 内部言語形式ノート—意味の探求— (六〇)</p>	

<p>ルソー『マルゼルブ氏への四通の書簡』(二三八) ルソー『対話録』余聞(四二二) ダランヘル「ジュネーヴ論」(四四) ジュネーブ市民(ルソーについて)(四六) ルソー『学問芸術論』の背景 — デイジョン・アカデミー(四九) アンドレ・シェニエの政治的散文 一(五〇)・二(五五) アンドレ・シェニエ覚書 一(五一)・二(五六) アンドレ・シェニエとイギリス(五二) ルソー『ボームン殿下への書簡』 — ジュネーヴとの関連において(五三) ルソーとヴォルテール 一(五七) ビュマン述『ジャン・ジャック・ルソー讃』(六一) ラツォシュ編『アンドレ・ド・シェニエ全集』 — 一八一九年の「解説」について(六四) モーリス・パレス述『ルソー誕生二百周年』(六五) アンドレ・シェニエの政治的散文(二) — 「ジャコバン党」(六六) ヴォルテールの哲学詩(六八)</p>	<p>中村 幸彦 西鶴における創作意識の推移(五八) 江戸時代上方における童話本(五九) 翻刻女官公御連哥(六〇) 林羅山の翻訳文学「化女集」、「狐媚鈔」を主として(六一)</p>
<p>柳里恭の誠の説(六三) 印刷の時点—仮名草子小考—(六五) 五井蘭洲の文学観(六六)</p>	<p>中山 竹二部 「貧者の友」ウイリアム・ラングランド(一) イギリスの中世の宗教劇(五) イギリスの古劇の詩形について(九) チョウサアと現代英語(一九) 散文韻律について(一九) チョウサアに於ける措辞的特徴について(二二) ウェリイの英訳『源氏物語』(二二) チョウサア その生涯と性格(二七) キヤンタベリ巡礼の世界(三〇) チョウサア二面性(三三) 『サ・ガウエインと緑の騎士』について(三四) メリデイスの詩について(三五) チョウサアの『トロイルスとクリセイデ』(三六) ソオロウとその生活観(三七) 英文学と貧困(三八) イギリス宗教劇の世俗化(三九) ウェイクフィールド劇「第二羊飼の段」(試訳)(四〇) 『ヨーク劇』「イサク人身御供の段」(四二) ル・モルト・アルテュール(四四) 頭韻式「モルト・アルテュール」について(四七)</p>

<p>憶出と偶感(五七)</p> <p>成瀬 正 一</p> <p>十八世紀に於ける文芸サロン(一) (二)</p> <p>新旧両派の文芸論争(七)</p> <p>モンテーニュと東洋の悟道(一六)</p> <p>旅行報告書(一六)</p>	<p>大江 三 郎</p> <p>日本語中の外来語における母音呼応(六六)</p> <p>Perfect and Progressive in English Transformational Grammar(六七)</p> <p>On the Importance of Linear Order in English Relativization(六八)</p> <p>願望のタイの前でのヲとガの交替(七〇)</p>
<p>西田 越 郎</p> <p>シュタイフターについて(四三)</p> <p>ワルテル・フォン・デル・フォーゲルワイデについて(四五)</p> <p>ワルテル・フォーゲルワイデの <i>Elegie</i> と <i>Kreuzlied</i> (四六)</p> <p>ゲオルク・ビュヒナー 一(四八)・二(四九)</p> <p>ワルターの宗教性について(五〇)</p> <p>ハインリッヒ・フォン・モールゲンミッネの二形態 (五一)</p> <p>ヴァルター・フォン・デル・フォーゲルヴァイデ 一(五三)二(五五)</p> <p>「パルチファール」における <i>leit</i> の問題(五七)</p> <p><i>Überfendung</i> について——の報告——(六五)</p>	<p>岡村 繁</p> <p>唐末における曲子詞文学の成立(六五)</p> <p>陶淵明論(六八)</p> <p>『歴代名画記』校注 一(六九)</p> <p>奥村 三雄</p> <p>アクセント史料としてみた平曲譜本(六九)</p> <p>小野島 行 忍</p> <p>サッカ・パンハ・スツタンタ(三)</p> <p>リッ・サンハーラ(一〇)(一一)(一二)</p> <p>訳梵漫語(二三)</p> <p>梵詩メーガ・ツータ散文訳(二八)(二九)(三一)</p> <p>草枕そぞろごと(三三)</p> <p>梵語奈留別誌(三四)(三六)</p>
<p>野上 豊一郎</p> <p>杉田玄白とその周囲の人たち(一九)</p> <p>使徒警見(三五)</p>	<p>ペロル(ジャン)</p> <p>Littérature, Langue française et monde moderne(六一)</p>

笹月清美

- 天平八年の遣新羅使一行の歌 (一三三)
- 古事記の文芸的性質に関する認識の發展 (一七)
- 文芸活動の機構 (二一)
- 本居宣長における道と文芸 (一三三)
- 語意考の成立過程を示す二・三の伝本について (二六)
- 本居宣長の国語研究 (二九)
- 小林歌城のテニオハ説 (三一)
- 富士谷御杖の言語論について (三三)
- 夕顔 (四〇)

佐藤通次

- 世界の極性とゲーテの「ファウスト」 (一)
- 雅歌 (四)
- 生の悲劇性 (八) (九)
- 「思う」と「考える」 (一〇)
- 数・性・格と体験 (一四) (一六) (一七)
- 「老」と「親」とについて (二一)
- 創世神話とわが民族の原体験 (二三)
- 「生む」の論理的構造 (二五)
- 「超人」の事行論的解放 (二七)
- 表現の二契機―「見る」と「生む」と (二九)
- 文学史の志気―「ファウスト」研究に寄せて― (三一)
- 歴史と形態変化―ゲーテの研究の一齣 (三三)
- 創刊の頃 (四〇)

重松 泰雄

啄木の社会思想について (四三)

進藤 誠一

- 「フィガロの結婚」とボーマルシェー (一)
- ユーリエーヌ・ラブツシュの喜劇 (六)
- スクリーブの功罪 (八) (九) (一一)
- コメディ・フランセーズの沿革 (二四) (二五)
- 十九世期中葉以後に於ける仏蘭西風俗劇 (二八) (二五)
- 日本に於けるコメディ・フランセーズ (三三)
- モリエールの結婚 (二七)
- マリヴオー賞書 (二九)
- フランスに於けるイタリア人劇団の業績 (三三) (三四)
- 「ブリタニクス」から「五大力」へ (三三)
- 作者兼俳優 (三五)
- フランス最古の喜劇 (三六)
- モリエールの芸風について (ノート) (三九)
- マダム・ド・ロングヴィルの生涯 (四〇) (四五)
- ルニヤールの喜劇 (四三)
- ランブイエ侯夫人のサロン (四七) (五〇)
- 中山さんと私 (五七)
- 感想 (六一)

白石 悌三

一宗匠誕生の周辺―水間沾徳賞書 一 (六二)

杉浦 正一郎

「奥の細道」の制作心理(四一)
「花屋日記」の著者俳人文暁の研究(四三)
鷗外博士の俳句観、及び其の俳句について(四四)
九州蕉門の研究 一―枯野塚と『枯野塚集』―(四五)
九州蕉門の研究 二―

―「漆川集」と筑前嘉穂俳壇について―(四六)

死に近き芭蕉―芭蕉の曲翠苑新資料書簡を中心に―(四八)
九州芭蕉門俳諧史概説(四九)

芭蕉連句研究 一―「升買て」の巻(五〇)

芭蕉連句研究 二―「けふばかり」の巻・「芹焼や」の巻(五一)

芭蕉連句研究 三―「松風に」の巻(五二)

芭蕉連句研究 四―「此の里は」の巻(五五)

素堂の真蹟二種について(五六)

朱雀 成子

『オセロ』―デステモーナのいわゆる

「完全な愛」についての一考察―(六九)

Doctor Faustus―Faustus 博士の damnation への道―
(七〇)

高木 市之助

吉野の鮎(一二七)

国見放(三〇)

牡丹芳(三三)

玉島川仙媛放(三五)

酒仙供養(三六)

思出十年―私本位に書きつづるところの―(四〇)

高橋 義孝

芸術学、芸術史における没価値性の意味

―ウエーバーの一論文を中心に―(四〇)

トーマス・マンのフロイト論(四一・四二)

創造的余剰(四四)

「統一ヨーロッパ」意識の現代ドイツ文芸理論における諸

反映 一(四五)

文学と社会との連続・非連続の問題(四六)

芸術は「進歩」するか(四九)

能の美学・序説(五〇)

ルカーチュの論文「上部構造としての文学」に対する批判
(五一)

文学研究に対する「精神分析」の諸寄与 一(五五)・二
(五六)

芸術的感動について―文学研究に対する

「精神分析」の諸寄与(その三)(五七)

メフィストフェレス考(五八)

世阿弥「花」と「物まね」(六一)

芭蕉小論―ある論稿断片(六二)

美とイデオロギーと文学(その一)(六四)

<p>Thomas Mann in Japan zu seinem 12. Todestage (六五) マルクス主義の光の下に見られたゲーテの『ファウスト』 ——ルカーチュの『ファウスト論稿』——(六六)</p>	<p>故坪内博士の『英文小学読本』(一一) 日本とシェイクスピア(一六) 日本に於ける英文法紹介及び研究の歴史(二〇) 俳句と英詩(二三) 生活、文化の反映としての英語史緒言の一節(二六) 言語起源の問題——英語史「第一部概観」の緒論——(二九) 言語を通して見る英人祖先の生活——大陸時代——(三二) 日英語音の異同と国民性(三三) 人及び作家としてのシェイクスピア(三五) シェイクスピアの女性観(三六)</p>
<p>高田 淑 Hans Carossa und der Zweite Weltkrieg(六九)</p>	<p>鶴 久 上代特殊仮名遣の消滅過程について ——「野」字の変遷をめぐって——(五五)</p>
<p>田中 晃 表現の構造(一六) 万葉歌人の国家思想(一八) 行為と哲学(二〇) 日本的現実主義と「もののあわれ」(三三) 生成の根拠としての自然(三五)</p>	<p>ウェリングズ(N・G) The New Poetry(六一)</p>
<p>田中 栄一 Musset の作品にあらわれたイタリヤ(六五) Barbey d'Aurevilly の《Les Diaboliques》(六八) Stylistique linguistique/Stylistique littéraire(七〇)</p>	<p>矢島 徹輔 廈信の絶句体詩における文字意識の転換(六五)</p>
<p>豊田 実 日本に於けるシェイクスピア紹介の歴史(一) 英吉利漂流邦訳考(四) 芥川龍之助とエドガ・アラン・ポオ(七) 基督教聖書和訳の歴史(一一)</p>	<p>山内 普卿 六朝時代の展望(一) 傘子問題の清算(四・五・六) 王鳴盛子の仏典観(一一)</p>

矢田部 達郎

古語に於ける「てには」の意義 (三二)

吉町 義雄

「物類称呼」西国方言索引 (一)

九州方言の特異性 (三二)・四(三)・五(五)

島津斎彬の「ローマ字日記」と長田穂積の「菊池俗言考」(七)

博多仁和加用語に現れた活用一段化趨勢 (一〇)

日本語動詞現在時形態論 (一五) (一七) (一九) (二二) (二四) (二六)

九州方言四段変格活用動詞分布相 (二二)

紫雲山人鹿兒島方言文学書四抄 (二八)

施福多「日本文庫及び日本文書研究提要」前(三〇)後(三三)

奥都創刊日本語辞書 (三三)

大和口上言葉集 (三四)

上海刊行日本語文典 (三五)

九州方言推量・打消動詞活用分布相 (三六)

「日本風俗備考」蘭日会話 (三七)

九州方言指定・比況助動詞活用分布相 (三八)

対馬字引「日暮芥草」府中語抄 (四〇)

九州方言敬讓・希求助動詞活用分布相 (四二)

「園翁交語」と「八丈実記」の島言葉 (四二)

イブン・マーリックの千一行詩並語文法(四三)(四七)(五〇)

九州方言感動詞訛形分布相 (四四) (四五) (五九) (六一) (六二) (六三)

九州方言感動詞訛形分布相 (四四)

九州方言代名詞訛形分布相(四八)

滑稽洒落一寸見た夢物語(五二)

「欧弗旅行記」瑞日語彙(五七)

露都創刊露日小辞書(六〇)

明治十年長崎出版拉語講義(六一)

博多漫話(六三)